

伊勢の今を伝える

ISEBITO NEWS

夏・秋号

第7号

いせびとニュース

●発行 伊勢文化舎 伊勢市観光協会
おかげ参り推進委員会
●発行部数 10万部
●企画・編集 伊勢文化舎
〒516-0016 三重県伊勢市神田久志本町1474-3
TEL (0596)23-5166 FAX (0596) 23-5241
E-mail otayori@isebito.com

7

夏、見浦で 神様の 御塩づくり

満潮で潮を入れ、
干潮に抜く。
天日に干し、浜風にさらす――。
天と地の大いなる力をうけて、
神様の御塩づくり。



五十鈴川河口の御塩浜で行われる入浜式製塩。 撮影/阪本博文

潮から御塩へ

毎夏、土用になると、伊勢神宮の御塩づくりが始まる。御塩浜は、五十鈴川が伊勢湾にそそぐ河口近くにある。整地された砂地の入り口に立つ黒木の鳥居は、神様が見守っておられることを示している。御塩は、神様の御饌(お食事)に、また、祓い清めにと、神事には欠かせないのである。二見(伊勢市)は伊勢神宮の鎮座の昔から今日まで、その御塩づくりにかかわってきた由緒ある海辺の里なのだ。

御塩浜の塩づくりは昔ながらの入浜式。潮の干満、太陽熱、浜風；自然の大いなる力をたのみ、炎天下で一心に作業はつづけられる。こうして夏の土用に採れた鹹水(濃い塩水)は、御塩殿神社の境内にある御塩汲入所に運ばれ、壺に移して一旦貯蔵される。

八月に入ると、御塩焼所で荒塩づくりが始まる。鹹水を鉄製の平釜に移し入れ、竈を薪で焚きつづけ、煮詰めていく。

秋、十月五日、御塩殿祭が行われる。つづく五日間、荒塩は次々と型に入れて焼き固められ、ついに御塩の完成となる。

来年は、いよいよ式年遷宮の年。二十年に一度の重要な神事が数多く行われる。そのためにも、今年の御塩が無事に豊かにつくられることを祈りたい。

●問い合わせ 神宮司庁
☎05966・24・1111

●主な内容
2・3・4面

特集 神様の御塩づくり

- 5面 遷宮への道 太刀身づくり
- 6面 遷宮入門 その3 御白石持行事上
- 7面 おかげの国をめぐる(十一)
- 8面 いせびと歳時記



遷宮で結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

大海の豊かさを凝縮して 神様の御塩づくり

撮影／阪本博文

倭姫命が二度も振り返って見られたと伝わる(倭姫命世紀)
景勝の海辺二見。その御塩浜で古代さながら御塩づくりが行われている。



潮たごで沼井の鹹水を運ぶ。

入浜式製塩を伝えて

二見で伊勢神宮の御塩がつくれるようになったのは古く、皇大神宮(内宮)鎮座の時に始まると伝えられる(堅田神社の由緒、4頁参照)。
四方を海で囲まれた日本の塩づくりは、昔から海水を採取して各地で行われてきた。五十鈴川の河口一帯の岸辺にも塩田があり、長

年、製塩が盛んだったという。画期的なイオン交換樹脂膜式による製塩が業界主流となった昭和三十年代から、塩田は全くとってよいほど日本の海辺から姿を消した。

炎暑は絶好の製塩びより

梅雨明け十日、といわれる晴天つづきを狙って、夏の土用に御塩浜の採鹹作業が始まる。
白衣の御塩調製者たち五人は、黒木の鳥居をくぐると、はきものを脱ぎ、素足となって丸木橋を渡り御塩浜に入る。
まず、浜おこしだ。長さ三



“浜をひろげる”作業は熟練と労力を要する仕事だ。

のスキを三人がかりで引いて、

浜の表面を掘り返して潮を含みやすくしたあと、平らにならす。満潮を待って、潮を浜に引き入れ、満々と冠水させて浜を潤し、次の干潮時に放水する。

翌朝は、浜おろしから作業開始だ。日の出とともに沼井(浜に四箇所設けてある鹹水を集める穴)の中の砂を浜ぐわで掘り出す。次に、浜をひろげる。浜ぐわでその砂をむらなく御塩浜にまく作業で、これは熟練を要するし、労力もいる仕事だ。

その時刻になると、太陽はじりりと容赦なく頭上から照りつけるが、潮を含んだ浜砂は日射と浜風で乾いてゆき、じんわり着実に塩を濃縮させる。

やがて乾いた砂を集め、四つの沼井へ運び込む。その上から海水を注ぐと、濃い塩水(鹹水)が底にたまる。これを潮たご(桶)で運び出し、四斗樽に詰め、一日の採鹹作業は終わりとなる。

一週間かけて三十樽

一日に採れる鹹水の分量や潮の濃度は、神宮司庁御料地課の職員によって日々克明に記録される。海水は自然のもので、晴雨によって濃度もかなり幅があるそうだが、一日平均四樽の鹹水を探り、およそ一週間かけて、三十樽になると、御塩浜での作業を終える。



御塩焼所では鉄の平釜に鹹水を入れ、煮詰める。



御塩汲入所の甕に4斗樽の鹹水を移す。



御塩浜で潮たごから4斗樽に鹹水を移す。



竹の砂かきで“浜かえし”を行う。



沼井に集めた砂の上から潮水を注ぐ。



伊勢名物

福

本店 〒516-0025 伊勢市宇治中之切町26番地
電話 0596-22-2154(代) ファクシヤル 0120-081381
<http://www.akafuku.co.jp/>

堅塩は辛櫃に納め 御塩道を外宮へ運ばれる

御塩焼所で荒塩づくり

御塩浜から約一キロほど離れた松林の中に、神宮の所管社である御塩殿神社がある。その境内に御塩殿、さらに裏手には御塩汲入所と



10月5日御塩殿祭 (御塩殿神社)

御塩焼所が並んで建っている。二つとも天地根元造りで、萱葺の屋根が直に大地から生えたような古代の様式がうかがえる造りである。

御塩汲入所の中には壺が十二個並んでおり、樽で運んできた鹹水は、この壺に移し貯蔵される。

八月上旬、鹹水を煮詰めて荒塩にする作業が行われる。今度は、御塩焼所の方の竈に直径二口の鉄の平釜をかけ、鹹水を満たし、二人ずつ昼夜交代で薪を焚く。塩が焦げないように絶えず底からかきまぜながらの作業だ。この建物には昔から煙突はないので、煙がもうもと立ち込める。その中で塩を取り出す時期を見極めるのは、熟練者といえどもなかなか難しい。

こうしてできた荒塩は俵につめ、苦汁は自然に抜けるにまかせて、秋の祭典まで保存される。



喜多井さんは毎朝7時には御塩殿神社に参り、神域の落ち葉を掃き清め、鳥居の櫛を取り替える。

御塩殿で御塩の焼固

毎年、十月五日に御塩殿祭が御塩殿神社で行われる。この神社に祀られる御塩殿の鎮守の神(塩土の翁とも)に塩づくりの無事を祈る祭りで、この日を期して、御塩殿で御塩の焼固が始まる。

御塩焼固を奉仕して六年目となる二見に住む喜多井紀忠さんに話をうかがった。

「塩は土器に入れて焼くのです



1日20個ずつ、100個の堅塩がつくられる

が、土器づくりもわたしの役目で

す。前回のうちに必要な教をご用意しておきます。神宮の祭典用

土器のすべてを作っている神宮土

器調製所(多気郡明和町)から土器

用の粘土が運び込まれ、形板に合

わせて三角錐につくる。

この土器に荒塩を固く詰め込ん

で二基の竈に十個ずつ並べ、神職

が火鑽具で起こした清浄な忌火で

窯を焚きつける。

日中新を焚きつづけて、夜は竈

の蓋を閉じておくと、夜が明ける

ころには堅塩が出来上がっている。

御塩が煙ですすけないよう、薪の

火加減が大切という。

「これを五日間つづけて、百個の

堅塩をつくります」。神宮では年

間に二百個を神事に必要とするの

で、御塩焼固は春にも行われる。

いよいよ御塩ができると、丁重に辛櫃に納め、紋付羽織の神職が随行して昔ながらの御塩道(4頁参照)をたどって外宮へと運ぶ。今では車を使うが、ルートは歩いてきた往時からのくねくねとした御塩道をたどるといふ。



上/御塩殿神社の前に方丈記の作者・鴨長明が御塩殿を歌った碑がある。右/神域の入口右手にある江戸時代の手水鉢。



二見瀉
神さびたてる
御塩殿
幾千代みちぬ
松蔭にして

鴨長明

上/大樹の茂る静かな神域に、御塩殿神社(左)と御塩殿(右)が並んでいる。
下/御塩焼固を始める前に、まず三角錐の土器に荒塩を詰める。



明治13年(1880)、明治天皇の御聖断を仰ぎ、伊勢神宮の遥拝所として建てられたのが「東京皇大神宮遥拝殿」、いまの東京大神宮です。皇室の御祖神である天照大御神をまつり、国民の総氏神として仰がれる伊勢神宮(内宮)の御神徳を皇都東京にあまねく宣布し、都民の心のよりどころになるようにとの願いから創建され130年の歳月が流れました。「東京のお伊勢さま」東京大神宮は、いまも伊勢神宮と都民の心を結んでおります。



東京のお伊勢さま



東京大神宮

〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-4-1
電話 (03) 3262-3566 FAX (03) 3261-4147
http://www.tokyodaijingu.or.jp/

JR総武線、地下鉄東西線・有楽町線・南北線・大江戸線
「飯田橋駅」徒歩5分

二見浦 をあるく

式年遷宮が来年となり、御塩の町・二見にはわかに注目度アップ。海辺の景色を楽しみながら御塩ゆかりのスポットを訪ねよう。



潮汲み、薪づくり...たくましい腕でおらかな笑顔で戸の塩づくり。人気戸の岩と五十鈴勢語塩ようかん。(下)



二見「外宮へ、不浄を避けて昔も今も 御塩道」

二見の御塩殿神社から伊勢神宮の外宮へ御塩を運ぶときは、今も昔ながらの「御塩道」を通る。清浄な御塩を運ぶ道なので、御塩道は葬列など不浄なものの通らない細道や脇道が選ばれた。車で運ぶようになった今も、この道順で運んでいるという。



御塩道にはところどころ手づくりの標識がある。

御塩づくりの始まりは 堅田神社

音無山の西の麓にある堅田神社は、二見から内宮と外宮へ御塩を献進する由来となった神社だ。

無垢塩草の幣でお祝い 二見興玉神社

「倭姫命が大神の鎮座の地をもとめて旅を重ね、二見の地にこられたとき、土地の神、佐見都日女命が堅塩を差し上げた。それを倭姫命は愛でられ、この地に堅田社を定められた」と伝えられる。ということは、少々だが、この神社は伊勢神宮より古いということになる。堅田神社は神宮の摂社で、祭神は佐見都日女命。古文書によると、昔は堅田神社まで海岸線が延びており、この辺りでも製塩をしていたようだ。



神宮摂社の堅田神社



浜参宮では無垢塩草で祓いを受ける。

トでは、この神社がスタート点となる。

神事により海から採った無垢塩草の幣で、さわさわとお祝いをしていた。

夫婦岩は夏至になると、早朝から大混雑。二つの岩の真ん中から太陽が昇るのを、見よう、写そう、渚で覗きようという人々でごったがえす。ことしは、曇ってはいたが、一瞬、富士山が見えた！と満ちた方々が多かったようだ。

お伊勢さんに参る前には、まず二見浦で禊する習わしが古くから伝わっている。来年、御白石持行事(6頁参照)では旧神領の町内ごとに、事前に「浜参宮」して身を清める行事が行われる。夫婦岩の前の二見興玉神社に参拝し、藻刈

神様の菜園 “神宮御園”

五十鈴川沿いに高い楨垣に囲まれた神宮御園がある。御塩とともに神様の御饌(お食事)にかかせないお供えの野菜や果物が清浄に栽培されている。広さは一町七反8174、4畝。

毎年、御園祭が三月の春分の日に行われ、豊作を祈られる。見学不可。

神宮御園の門

岩戸の塩 125円、820円、岩戸の塩工房 0596・43・422、岩戸の塩ようかん 1本 630円、50鈴勢語塩 0596・42・1212

注目！二見らしい本格派 岩戸の塩

神様の御塩はみやげにできないけれど、真正正銘、二見の海で採れる清らかな塩がある。夫婦岩に近い旅館・岩戸館で製造・販売している「岩戸の塩」だ。

薪を燃料として十五〜十六時間かけて煮詰めるという。見学どうぞ、の張り紙で奥の作業場へ。整然と積み上げた薪の壁に囲まれて、三段の釜が湯気をあ

げている。一段目は海水、二段目は濃度が高まった海水、三段目はすでに塩になっていて、ここを二人がかりで絶えずへらでかき混ぜている。「潮は満潮時に沖から寄せてくる新鮮なものを汲み上げま

す。場所は昔から地元で潮汲みをしてきた場所、海底から五十鈴川の伏流水が湧き出ており、それによってミネラルの多いきめ細かな美味い塩になるのだと思

います」と責任者の百木良太さん。大海の豊かさを濃縮した塩の味は、フアンの輪を広げている。



また、八月一日の「外宮さんゆ

かたで千人お参り」の日には、無病息災を祈って参拝者に小袋に入った塩がプレゼントされる。

伊勢おほらい町 豆腐庵山中

伊勢市宇治中之切町95番地 電話0596・23・5558 定休日/木曜

美しい五十鈴川の水を生かした 豆腐を作りたい

「和妙」にきたえ 水の良さを最大限 ひきたせるよう 作りあげた豆腐です。

おとうふソフト 「和妙」を50%以上 含むたろくの ソフトクリームです。

うの花びーなつ 豆乳とおからを 練り込んだ ヘルシーソフトです。

おかげ横丁

伊勢市宇治中之切町52番地 0596-23-8838(総合案内) http://www.okageyokocho.co.jp/

見よ、遊ぶ、味わう... 平成のお伊勢参りを 体験しに いっぺんきておくんない。

おかげの里 催しもの
7月28日〜8月19日：伊勢の匠展(体験あり)
9月8日〜9日：第十回神恩感謝日本太鼓祭
9月15日〜30日：第十八回来る福招き猫まつり

遷宮への道 7

御装束神宝の調製(四)



たままきのおんたち 玉纏御太刀

内宮正殿の御料となるのは、玉をまとう華麗な玉纏御太刀(写真左。撒下御料)、それに日本錫の尾羽で柄を飾る須賀利御太刀など。



鉄と火と、刀匠魂と

式年遷宮まであと一年。傑出した匠のもとで調製されてきた御装束神宝は、最終仕上げを迎えている。総数、七一四種一五七六六。その中に、存亡の危機を乗り越えて今に伝わる日本古来の太刀身がある。

撮影/森武史



折れず、曲がらず、よく切れる、日本の刀の特徴は、素材の玉鋼を折り返し鍛錬し、刃に焼きを入れる独特の製作から生まれる。



焼入れ前に、刃に注意深く「土置き」する天田昭次さん。

古刀の様式を今に伝える

神宝の太刀身は、直刀と呼ばれる反りのない切刃造で、刃文も直刃と呼ばれる真っ直ぐな刃文をつける。これは、古墳時代末頃から奈良時代にかけての古刀の特色であり、正倉院宝物にも共通する様式である。

後世にあらわれた反りのある湾刀に比べると、直刀の製作はより高度な技術力と経験を要する。加えて、神宝の太刀身の長さは並はずれて長いことが、調製をいっそう難しいものとしている。

新潟県新発田市、温泉の湧く静

神宝に助けられて

第二次大戦で敗戦国となった日本はGHQ(連合軍最高司令部)の統治下におかれ、日本刀は軍国主義を象徴する武器と見なされて、一切の所持と製作を禁止された。刀匠はことごとく転廃業を余儀なくされてしまったのである。

伊勢の仕事はありがたく、この体験が今日の仕事に生かされている。ご神宝はたいへんな仕事でしたが、再び刀が作れるというよろこびが全てでした」と振り返る。ほかの刀匠たちも、太刀づくりが今に伝わるのはあの式年遷宮があったから、と異口同音の声を残している。

現在、八十五歳の天田さんだが、齢を感じさせない身のこなしで作りに勤しんでいる。

三回目となる今回の調製については、「身の引き締まる思いでお受けしました。ご神宝の太刀は、常の太刀にはない難しさが随所にあり、終始、初心の緊張感をもっての調製でした」と語る。



焼入れの瞬間、反りが生じるのをいかに抑えるか——、御太刀づくりの極意のひとつとされる。



焼き入れ作業。800度ほど加熱する。

歴史は、時に理不尽きわまりない。千年以上継承されてきた伝統文化さえも、成り行きにまかされていけばあえなく淘汰される。その危うさを御太刀の歴史が示している。(取材・文 乾 淳子)

(註) 向樋 鉄を鍛錬する際に、刀鍛冶の小樋に対して、前方から使用する長柄の大樋を打つ後。

両宮の御料、人間国宝の技で

御装束神宝には、六十柄の太刀がある。内宮・外宮の正殿をはじめ、十四別宮それぞれに納められる神宝である。

太刀の調製は、太刀身(刀身)と太刀拵(鞘など外装)に二別されるが、今号は刀匠たちによって玉鋼から打ち出される太刀身に話題をしよう。

今回の遷宮で太刀身づくりに取り組んだのは、二人の人間国宝(内

宮御料・天田昭次氏、外宮御料・大隈俊平氏)をはじめとする十八人の当代を代表する刀匠たちである。

その中でただ一人、戦後初の第五十九回式年遷宮につき今回まで四度の遷宮にかかわったのは、天田昭次さん(85)である。平成九年に人間国宝にも選ばれた太刀作りの第一人者だ。

神宮から託されたのは、内宮の御料となる玉纏御太刀、それに須賀利御太刀の二柄であった。

かな町に天田昭次さんの工房はある。十三歳で刀鍛冶を志して上京し、日本刀鍛錬伝習所に入門。以来、太刀づくり一筋の人生を歩んできた。

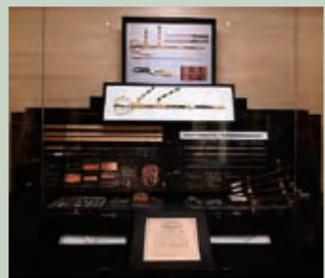
しかし、刀鍛冶として歩み始めてほどなく、未曾有の試練が天田さんを待ち受

ご神宝・御太刀のすべて 太刀身と拵を公開

「せんぐう館」の永遠の匠コーナーでは、内宮神宝の玉纏御太刀の調製工程品を近々とみることができ。映像では刀匠による太刀身の鍛錬の一部始終も見られる。

- 入館料 大人300円/小中学生100円/未就学児 無料
●開館時間 午前9時～午後4時30分(最終入館は午後4時まで)
●休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合はその翌日)

http://www.sengukan.jp/ TEL 0596-22-6263



「せんぐう館」の御太刀の展示。

Advertisement for 'Ise no Uchi' restaurant, featuring a bowl of food and contact information: TEL 0596-22-4175, FAX 0596-24-2510.

Advertisement for 'Nikodo' restaurant, featuring a building facade and contact information: http://www.nikodo.co.jp/.

Advertisement for 'Iwatoya' restaurant, featuring a building facade and contact information: http://www.iwatoya.co.jp/.

Advertisement for 'Iwatoya' restaurant celebrating its 62nd anniversary, featuring a building facade, contact information, and a list of products like 'Pearl Boutique' and 'Hundred Blessings'.

遷宮入門 その五

御白石持行事

〔豆事典〕(上)

御白石持行事はいよいよ来夏に迫り、御白石拾いが進んでいる。

なぜ、白石を御敷地に敷くのか—— 二回にわたり豆事典で歴史をたどる。

一、行事の概説

御白石持行事とは、神宮式年遷宮で新しく社殿が建てられた御敷地に、神宮の旧神領地に住む人々などが、御白石という白



新しく造営された正殿の敷地に白石をおさめる。(御白石持行事・内宮、平成5年)

色の敷石を奉献する行事です。(昭和四十八年伊勢市の無形民俗文化財指定)。この行事では、複数の御垣で囲まれ、通常立ち入ることができない正殿の周囲に御白石を奉献するので、新しい正殿を目的あたりにする二十一年に一度の機会でもあります。

かつて、式年遷宮に際して神領民が奉仕する仕事に木曳き・

土持ち・石持ちがありました。木曳きは御木曳行事となり、石持ちは御白石持行事となつて今日に伝わっています。土持ちは、土の運搬と、御敷地の地ならしと思われませんが、旧神領民によるこの作業は今日行われていません。

内宮は地理的な理由から白石が不足気味で、清砂持・清砂敷など石ではなく砂と称された時代もあったようです。

御白石とは、神宮の御敷地に敷き詰められているのではなく、現在は内玉垣より内側の空間と、正殿から正中線(中央部分)に沿って瑞垣御門から外玉垣御門に至るまでに敷き詰められています。十四所の別宮では、各宮の環境によって微妙に異なっていますが、概ね内院(瑞垣内)と瑞垣御門から正中線付近

に敷き詰められています。

三、御白石の読み方

御白石は、「御白石」「お白石」「白石」などと表記されます。読み方は「おしらいし」と読みます。古記録に「しら石」「しらいし」なども記されており、「しろいし」とは読まなかつたようです。

行事名の表記は近年変更がみられ、「お白石持行事」(明治四十二年度遷宮)、「白石持行事」(昭和三十八年度遷宮)、「お白石持行事」(平成五年度遷宮)などと表記されました。昭和四十八年に伊勢市無形民俗文化財指定には「白石持ち行事」で指定されるなど一定していません。平成二十五年度遷宮に際しては「御白石持行事」が神宮司庁が推奨する表記となっております。



新しく建て替えられた正殿(内宮)の周囲には神領民から奉献された白石が面に敷き詰められている。(平成5年、神宮司庁提供)

四、御白石持行事の始まり

御白石持行事の起源は定かではありません。初見とされるのは寛正三年(一四六二)「寛正三年造内宮記」で、「御内之掃除白石ヲ置事、宮司ノ勤也」とあります。また、室町時代中期の「神朝遺文」文正元年(一四六〇)に「白石を内

五、神領民奉仕の始まり

近世になり寛永六年(一六二九)第四十三回式年遷宮に際し、「神民数百人、宮川より砂石を運んで新宮の地に敷く。今日、田中

中世古これを持ち始む」とあり、また白石の存在は確認できませんが、白石を置いたのが神領民であったか否か、遷宮ごとの慣例であったかは不明です。

一方、「氏経神事記」寛正七年(一四六六)三月八日(二月に文正元年に改元)、「造営の度に白石を置いていたが今回は遷宮以後その沙汰が無い。將軍が参拝される前に沙汰するよう司中へ申し入れた。同十三日に瑞垣内の掃除の沙汰があった。司中が白石を置くことは遷宮以後、今まで沙汰が無かつたので、草は根深くなり、その根も固くて引きにくく、除草の跡も見苦しい。同十六日司中が將軍足利義政の催促によって参拝前に人夫十人で白石を置いた」と見えます。

この記事から、少なくとも寛正三年の遷宮以前には白石が瑞垣内に置かれていたと読み取れます。

後醍醐天皇の元享三年(一三三二)の第三十四回式年遷宮の時、役夫の調達ができず、繪旨により神三郡から杣曳き人夫が調達されました。それが契機となり、寛正三年(一四六二)の遷宮では、神領民が自発的に作業に従事したのが始まりとも言われています。

遷宮トピックス

新正殿の屋根に萱葺き始める 檐付祭 5月23日(内宮) 25日(外宮)

今年5月、内宮および外宮で檐付祭が行われた。屋根に萱を葺き始めるにあたり、造営の神・屋船大神に祈りをささげる神事である。両宮の新御敷地には、春に立柱祭、上棟祭を終えた新正殿が立ち、大屋根が萱を葺くばかりに仕上がっている。はじめに、神前に神饌を供え、萱の束の結び目がゆるまないよう守りたまえと祝詞を奏上したのち、技師一名、萱葺役夫二名が束を手に萱を葺く儀式をおこなった。萱は神宮の萱山で採集されたもので、今回の遷宮では23000束を使用する。



黒田清子さん、臨時祭主にご就任 5月13日 内宮と外宮に奉告参拝



伊勢神宮の臨時祭主に就任した黒田清子さん(天皇陛下の長女)が、5月13日両宮に奉告参拝を行った。また、翌14日には神様に絹と麻の反物をお供えする神御衣祭に奉仕された。神宮祭主は天皇陛下の代理として祭事を行うもので、現在、昭和天皇の四女、池田厚子さんが務めており、黒田さんは来る式年遷宮まで補佐役を務める。

ゆとりとやすらぎの宿 神宮会館 (財)伊勢神宮崇敬会

内宮に一番近い宿・歩いて5分となたでもご利用いただけます



〒516-0025 伊勢市宇治中之切町152 TEL 0596-22-0001 FAX 0596-22-1517

http://www.jingukaikan.jp

早朝参拝のご案内をしております。

- 商売繁盛・出世開運
職務安全・出世開運
病気の病氣・ケガ
心の病氣・ケガ
学力向上
合格祈願(入学・就職・資格・国家)
交通安全祈願
安産祈願・初宮詣・七五三



頭の深(神)呼吸に 来ませんか?

頭之守護神 知恵の大神

頭之宮四方神社

0598-72-2316

http://www.koubenomiya.or.jp/

●松阪よりJR線又は三重交通(前記特急)
●大内山駅下車徒歩10分
●紀勢自動車道 紀勢大内山ICより尾鷲方面へ車で5分

「おかげの国」をめぐろう！

お伊勢さん百二十五社のたまたま「おかげの国」。今回は、玉城町の西部、外城田川の両岸に広がる田丸平野に点在する十社を歩きます。



おかげの国

伊勢志摩エリアは神宮の百二十五社が点在する「おかげの国」。官民の組織「おかげ参り推進委員会」が、おかげ参りのような旅の提案に取り組んでいる。
事務局 伊勢商工会議所
☎0596-2255151

お伊勢さん125社とは

- 正宮(しょうぐう) 2社**
天照大神をまつる皇大神宮(内宮)と、豊受大神をまつる豊受大神宮(外宮)。
- 別宮(べつぐう) 14社**
正宮の「わけみや」の意味をもち、正宮と関わりの深い神をまつる格の高いお宮。式年遷宮も正宮に続いて行われる。
- 摂社(せつしゃ) 43社**
927年の『延喜式神名帳』に記載されている神社。
- 末社(まつしゃ) 24社**
804年の『延暦儀式帳』に記載されている神社。
- 所管社(しょくわんしゃ) 42社**
正宮や別宮に関わり、水や酒、米、塩、麻、絹など衣食住をつかさどる神々が多くまつられている。

おかげの国めぐりにおすすめ!

「おかげの国」をめぐるとは「お伊勢さん125社めぐり」を。歩きに便利なMAPや周辺の休憩処・土産物、伊勢神宮の知識など、旅に役立つ情報もたくさん。
●三重県内の主要書店、観光施設ほかで発売中!
定価1260円(送料1冊80円)
伊勢文化舎
☎0596-23-5166

十一 外城田めぐり

約14・5キロ
スタート&ゴール
JR参宮線外城田駅

このコースでは、田園風景のほか、農耕に関わる社をめぐります。スタート地点のJR参宮線外城田駅はのどかな無人駅。辺りは、一面に水田が広がっています。右手に見えるのが、御船神社の森。入り口では大きな常夜灯が迎えてくれます。次の朽羅神社は、宮の森が目印。ひらけた田野にぽっかりと浮かぶ、緑の小島を指して、農道を進みます。

さらに、熊野街道を横切り、原地区へ。灌漑地を見下ろす高台に津布良神社があります。

国東山(くわんとう)にある禅宗の山田寺を通り過ぎ、竹林の小道へ。上を伊勢自動車道が走るトンネルをくぐると、山道にです。十五分ほど登ると沢音が高まり、苔む



朽羅神社の森は、遠くからでもすぐに見つけられる。

線路に沿って西へ歩くと、ほどなく外城田駅に着きます。
(取材・文 中川絵美子)

- 1 御船神社** みふねじんしゃ [内宮摂社] 倭姫命が外城田川を渡る旅の途中に定めた社。同座の神とともに外城田川の守り神。
- 2 同座 牟弥乃神社** むみのんじんしゃ [内宮末社]
- 3 朽羅神社** くろらじんしゃ [内宮摂社] 田や畑を守る農耕神をまつる。くちらとは「籠る」の意味があり、古代から神の籠る大きな森であったと思われる。
- 4 津布良神社** つぶらじんしゃ [内宮末社] 祭神の津布良比古命と津布良比賣命は、大水神の御子で田野の水の神。
- 5 鴨神社** かものじんしゃ [内宮摂社] 祭神は農耕灌漑の守護神。境内のすぐ下を流れる沢は、どんな日照りにも枯渇したことがないという。
- 6 田乃家神社** たのえんじんしゃ [内宮摂社]
- 7 田乃家御前神社** たのえんまへじんしゃ [内宮摂社] 祭神の大神御瀧川神は農耕する人と家の守り神。



鴨神社近くの沢。



田園をのぞむ棒原神社。苔の美しい蚊野神社。



屏風でたどる伊勢参り

おかげ参道の

6 浜参宮

いよいよ来年の夏は神領民といわれた伊勢の人々が待ちに待った「御白石持行事」が始まる。それに先立って「浜参宮」というのをやる。

これはお木曳と同じように、お白石奉納の奉仕の前に二見浦に出て禊祓いの潔斎を行なう。これがいつの頃から始まったのか定かでないが、海の潮水で身を清めることはイザナギノミコトの神代の昔から。

門脇俊一画伯の大屏風にも二見浦の夫婦岩の前で禊をする老若男女が描かれている。これが浜参宮である。

古く正式に参宮する場合、二見浦に行き海水を浴びるか、潮風に吹かれて身を清めてからお参りする慣わしであった。今も二十年に一度の目出度いお木曳と、お白石持にその伝統はしっかりと引き継がれていて、どの町も参加者全員が浜参宮に参加する。それは普段あまり交流のない近所の人々と親しくするコミュニケーションの場となり、レクリエーションともなっている。

屏風の絵を見て「海水浴をしている」といった人がいる。ここは明治の初め日本最初の海水浴場になった歴史も在るが、これはお遊びではない。

浜参宮は二見興玉神社に参り、お祓いを受け「藻潮草」というお清めのお守りを受ける。そして身も心も清々しくして内宮・外宮の神前へ進むのである。

お白石持は御正宮のすぐ前まで入れる二十年一度の機会です。あなたも参加できるとよしいが。



文・矢野憲一 NPO法人五十鈴塾塾長。四十年間神宮に奉職した元神宮福宜。神宮司庁文化部長、徴古館農業館館長などを歴任。著書に「伊勢神宮の衣食住」、「鮫」、「アワビ」、「枕」、「杖」、「亀」、「籠」など多数。



伊勢志摩産のあわびを使った本物の熨斗袋。先様の健康と長寿を祝う心を形にした伊勢熨斗。各種熨斗紙・熨斗袋・祝儀袋を取りそろえています。



海女の話聞きながら、海女小屋で新鮮な魚介に舌つみ。漁場に近い海女小屋で、海の幸の採り手である海女達の話を聞き、手焼きによる魚介をいただきます。(100名様収容)

神話の時代から続く伊勢志摩の海女文化を伝えたい

海女文化を提供する **兵吉屋**

〒517-0032 鳥羽市相差町1094番地 TEL 0599-33-6145 FAX 0599-33-7407



- ◆本社 伊勢市上地町2691-13 電話0596・23-1281(代) ☎0120-00-0707
- ◆本店(外宮前) 伊勢市本町19-19 電話0596・23-3141(代)
- ◆参宮業務 伊勢市上地町2691-51 伊勢問屋センター前 電話0596・20-3958(代)
- ◆内宮前店 伊勢市宇治中之切町87 電話0596・28-0081

E-mail info@sekiya.com http://www.sekiya.com



あわびのめし

「日本の心」を味に託して—— うましくに伊勢の銘品 独特の「醬」、一子相伝の「たれ」をたっぷり使い、手間を掛けて、ふっくらと柔らかく煮込んだあわびを「参宮あわび」とよばせていただきました。

いせびと歳時記

夏から秋にかけての伊勢志摩のまつり・イベント情報

8月

1日(水) 外宮さんゆかたで千人お参り

「八朔参宮」の古き良き風習をよみがえらせ、ゆかたで外宮を参拝し、夏の風情を楽しむ行事。外宮周辺に屋台が並び、踊りなどの催し物もある。

17時、伊勢神宮外宮・外宮周辺
外宮にぎわい会議(坂田)
09032577674



外宮さんゆかたで千人お参り

14日(火) 河崎踊り

伊勢音頭の原型といわれる河崎音頭。三味線や太鼓が響くなか、音頭に合わせその衣装で踊る。

0596223452



河崎踊り

17日(金)~18日(土) 佐瑠女神社例祭

芸能の神天宇受売命を祀る佐瑠女神社の例祭。17日の宵祭ではステージイベントもあり、約3000灯の提灯が境内を照らし幻想的。

0596222554

1日(水)~15日(水) 鳥羽湾毎夜連続花火

鳥羽の港々を順にめぐり、連夜花火が上がる。鳥羽の夏の風物詩として定着している。小型花火を含む約100発。

21日(火)~28日(火) 小浜連続花火

0596255096

9月

4日(土) 風日折祭

御幣を捧げて、風雨の順調と五穀の豊穡を祈る。5月にも行われる。

5日(水) 夫婦岩大注連縄張神事

0596432020

8日(土) わらじ祭(本祭・わらじ流し)

先祖供養の盆行事。白装束の若者が8尺もの高さに噴き上がる手筒花火を手にし、その火の粉で身を清める。花火が終わると、先祖の霊を慰めるかんこ踊りが踊られる。(手筒花火は暗くなってから、おおよそ19時以降)

14日(火)~15日(水) 大念仏かんこ踊り・手筒花火

0596227884

8日(土)~9日(日) 神恩感謝日本太鼓祭

日本全国から太鼓打ちが集まり、日々感謝の思いを太鼓の音に込め、神宮に奉納する。一帯では催し物や屋台も出る。

10月

15日(土) 守武祭・俳句大会

室町時代の内宮神主である俳諧の祖荒木田守武氏を顕彰する俳句大会。宇治神社での守武祭後、内宮の参集殿で俳句大会が行われる。

15日(土)~16日(日) 安楽人形芝居

400年以上にわたり継承されてきた人形芝居。安楽神社境内にある舞台上演の重要無形文化財。

15日(土)~30日(日) 来る福招き猫まつり

招き猫作家たちの作品展示や即売、絵付け体験やスタンブラーが行われる。おかげ横丁一帯が招き猫一色となる。

16日(日) 馬瀬の狂言

室町時代に農民の間で伝えられた大蔵流が、江戸時代中期に和泉流となり今に伝わる。毎年馬瀬町の秋祭りに披露される。馬瀬町狂言保存会

21日(金)~23日(日) 秋の神楽祭

内宮神苑の特設舞台で神宮舞楽が一般公開される(雨天時は内宮参集殿)。期間中は神宮茶室を庭上から見学できる。

13日(土) 浜島大祭

宇氣比神社の例大祭。各組によって工夫して色とりどりに飾りつけられた町内に拍子木や笛の音が響き、子ども神輿が町を練り歩く。

14日(日) 神御衣祭

皇大神宮と荒祭宮に和妙(絹)と荒妙(麻)の2種類の神御衣を奉る。

14日(日)~15日(月) 神嘗奉祝祭

神嘗祭を祝って、日本三大民謡、三大盆踊り、三大パレードなど全国のお祭りが伊勢に集まる。14日には、前夜祭を開催。

15日(月)~25日(木) 神嘗祭

神宮の一年の祭りの中で最も重要な祭り。その年の新穀をお供えして神様に感謝する。

15日(月) 御酒殿祭

神嘗祭でお供えする白酒、黒酒などの御料酒がうるわしく醸造できるよう祈る。

15日(月) 初穂曳(陸曳)

奉曳車に初穂をのせ市内を練り歩いて、外宮へ奉納する。

23日(金)~29日(木) 新嘗祭

天皇陛下が宮中で新穀を神々に奉り、自らもお召し上がりになる祭り。神宮では天皇が勅使を遣わされ幣帛を奉納する。

16日(火) 初穂曳(川曳)

初穂船に初穂をのせ五十鈴川を遡り、内宮へ奉納する。

23日(金) 二船祭

2隻の船に地元の若者が5名ずつ乗り込み、船をこぎ、その早さを競う。

写真展「日本人のこころ」

常設平成26年春頃まで撮影 森武史
9時~17時 最終入場は16時30分まで(入場無料)
伊勢市 五十鈴総合おひら町通り 赤福本店横
0596222154

専用列車「かぎろひ」がデビュー

旅行会社のクラブツーリズムが観光ツアー専用列車「かぎろひ」を走らせている。「かぎろひ」は万葉集にも詠まれており、「輝く光」の意味で、ホディーはグリーンカラーで荘厳な感じさせる。「旅行がもっと好きになる電車」がコンセプト。伊勢志摩や奈良大和路のツアーのほかカルチャートレインとしても利用される。

クラブツーリズム(株)カルチャー旅行センター
03-5323-6940



4両編成(2両1編成)。定員180名。車内で講座・イベントが行えるスペースやパーカウチャーなどを備えている。

データは6月末現在、まつり・イベントは主催者側の都合により、変更になる場合があります。お出かけの際はあらかじめ電話でご確認ください。

購読のご案内
本紙を購読ご希望の方は、ご住所・お名前・電話番号・希望号数を明記の上、1回につき郵送料100円の切手を同封し、伊勢文化舎までお送りください。(年3回発行予定)
(送り先)
〒516-0016
伊勢市神田久志本町1474-3
伊勢文化舎内
「いせびとニュース」係

伊勢からの便り
旧暦八月一日は八朔。昔から五穀豊穣や無病息災を祈る祭りが行われていますが、伊勢では両宮にお参りする「八朔参宮」の風習が有りました。途絶えた風習を復活させたのが「外宮さんゆかたで千人お参り」。浴衣を着て外宮に詣で暑気払いを祈る祭りです。ぜひお出かけください。

伊勢文化舎代表 中村 賢一

近鉄

すべてセットのおトクなきっぷ。 “まわりゃんせ”
伊勢・鳥羽・志摩スーパーパスポート

おとな 9,500円 こども 5,200円 4日間有効

発売期間：平成24年12月26日まで
ご利用期間：平成24年12月29日まで

近鉄主要駅(伊勢中川駅以西以北の特急券うりばのある駅)、阪神三宮駅、KNTツーリスト・近畿日本ツーリスト、JTB・日本旅行各グループほか主な旅行会社など

〇旅客案内テレフォンセンター(8時~21時)年中無休 大阪(06)6771-3105/名古屋(052)561-1604 まわりゃんせ

伊勢志摩へでかけよう。